

**変革期を迎えた J リーグが目指すアジア戦略の道**  
**—クラブライセンス制度を受けて—**  
**An Asian strategy for J-League on organizational transformation**  
**—focusing on the system of club license—**

1K10C450 山下 源太

主査 作野 誠一 先生

副査 原田 宗彦 先生

**【目的】**

近年著しい発展を遂げる日本のサッカー界。競技レベルが飛躍的に向上しているのに対し、J リーグ及び各クラブの経営事情は悪い状況に陥っている。赤字続きで苦しい経営状態が続くリーグ及びクラブでは、今後のサッカー界に悪い影響を及ぼしてしまう。筆者は明るい未来を持った J リーグになるべく、J リーグが取り組みを始めた「アジア戦略」をもとに今後の打開策を検討していく。本研究の目的はアジア戦略の可能性を明らかにすることである。

**【方法】**

本研究の研究方法は文献調査である。第一に 20 年を迎えた J リーグの歴史について調べ、成り立ちの過程から現在までの軌跡を明らかにしていく。

第二に J リーグの経営現状について調べ、収入の仕組みや赤字の要因を明らかにする。また「クラブライセンス制度」という赤字に歯止めをかけるために施行された制度の詳細を明らかにする。そして筆者が、クラブライセンス制度を受けての打開策と考える J リーグがここ数年で動き出した「アジア戦略」の取り組みを見ていく。アジア戦略の核となる項目は①アジア選手の獲得、②アジア地域におけるスポンサーの獲得、③J リーグのアジアにおける絶対的な立場の確立である。

最後に、既にアジアという市場に目をつけていたヨーロッパの有名クラブのアジア戦略を明らかにし、今後 J リーグが行うべき取り組み及び求められる結果を提言し、考察で未来の J リーグ状況について検討する。

**【結果】**

J リーグが設立してからの 20 年間で、日本のサッカー界は考えることのできない速さで飛躍している。J リーグにおいても、クラブ数は圧倒的に増え、2014 シーズンからは新たに、ディビジョン 3 (J3) ができることが決まった。しかし、J リーグクラブの経営は芳しくなく、2010 シーズンにはリーグの半分のクラブが赤字という状況であった。この状態を打開するために、J リーグはヨーロッパを見習ったクラブライセンス制度を導入することを決めた。

この制度を受けた事で、J リーグクラブは黒字にすることが絶対的な条件となった。「3 期連続で赤字計上」、

もしくは「14 年度末の時点で債務超過」であった場合、次のシーズンではライセンスが交付されず降格または消滅というシビアな制度である。これを受けて取り組み出した J リーグの「アジア戦略」には明るい兆しがあると考えた。実際に今年 J リーグに移籍したアジア人選手を題材として見ると、そこには大きな利益が生まれとてつもなく大きな可能性を秘めている事が分かった。これによって J リーグはその動きを加速させ、国もこの取り組みに協力するなど大きな活動となっている。

**【考察】**

J リーグクラブが赤字で苦しむことなく、明るい未来を築きあげていくためには、この「アジア戦略」に対してより真剣に向き合い、積極的な動きを図ることが最も大事だと提言する。具体的な活動を見ていくと大事な点が二つある。

一つ目は積極的にアジアの選手を獲得することである。東南アジアの選手を獲得することで、J リーグを各クラブに広めていくことだけでなく、現地にスポンサーを売り込むことが出来る。またサッカー人気が沸騰しているアジア地域の選手を J リーグに連れてくる事が出来れば、放映権料も獲得することができる。

二つ目はアジア地域のクラブと提携を組むことである。提携を組むことで互いの交流が図りやすくなり、J リーグ移籍への架け橋となることが可能になる。また、提携クラブ先の育成にも関わる事でより力のある選手を見つけ出し、ただの金銭目的での選手獲得を回避することが可能になる。未来のある選手を獲得できる、かつ豊富な利益を見込めるとなるとこれ以上ない明るいニュースである。

ただし不安要素もある。アジアというサッカーがそれほど浸透していない地域の選手を獲得する前例が少なすぎる事、また J リーグで本当に活躍できるだけの選手が発掘できるのかなど不安視する声もある。当然、新しい取り組みを始めるにあたってこうした声は当然だろう。ただでさえ赤字なのに、その中で日本では無名なアジア人選手を獲得するというのは簡単なことではないだろう。

しかし、大幅な利益が見込める可能性があり、成功すれば J リーグは日本だけでなく、アジア全域にとって素晴らしいリーグとなり、さらなる成長を遂げるのは間違いないと断言できる。